



大久保淳一氏⁽⁴⁸⁾ ゴールドマン・サックス証券 証券部門部長

闘病中の人たちへの思いを胸に電子取引関連の営業に駆ける がんを乗り越えフルマラソン完走

精巣腫瘍(がん)と併発した難病の肺線維症。生存率20%以下という闘病生活を乗り越え、100キロマラソン完走をめざす。

2007年までは「健康そのもの」の生活を送っていた。顧客の勧めで始めたマラソンにはまり、フルマラソンは30回以上、走行距離100キロという過酷さで知られる「サロマ湖100kmウルト

ラマラソン」(北海道)も4回完走した。

しかし、トレーニング中のけがで運び込まれた病院で、がんが見つかる。すぐに摘出手術を受けたが、全身への転移が判明。過酷な抗がん剤治療を3カ月続けた後、17時間に及ぶ開腹手術でがんの壊死(えし)を確認した。ところが、今度は抗がん剤

の副作用で生存率が20%以下という難病の肺線維症を発症してしまう。

肺活量が半分になり、呼吸困難で死を意識する毎日。それでも、「家庭でも仕事でもやり残したことがたくさんある」と社会復帰への強い意欲だけは失わなかった。都合10カ月の入院生活を経て、幸い症状は快方に向



かった。自宅療養と、体調が許す範囲での短時間出社を経て、現在はフルタイムで電子取引関連の営業責任者を務める。

今年4月には「入院中の自分との約束」だったフルマラソン完走を果たした。次は「7年ぶ

りの北の大地」だ。来年のサロマ湖ウルトラマラソン完走を目標に、月間200キロ以上の厳しいトレーニングに励んでいる。

がん患者や家族の相談に乗る機会も増えてきた。「せっかく病を乗り越えても、閑職に追いやられたり、暗に退職を求められたりつらい思いをしている人も多い。これからは病氣と闘っている人たちの不安を和らげ、社会復帰への手伝いができれば」と意欲を語る。

「病氣になったことで得た物の方が大きい」。生かされた意味をかみしめる毎日だ。

(佐野彰洋)